

蠶 絲 學 雜 誌

第 五 卷 第 二 號

昭和七年十一月

報 文

桑葉上の黄粉菌 *Glomerularia Mori* (新種) に就て遠 藤 保 太 郎
今 村 良 郷

1. 寄 生 状 態

上田蠶絲専門學校圃場に於て始めて之を發見したのは、大正十三年十一月五日で桑葉の上面に發生せる煤病菌 (Sooty molds) と混つて居たものであつた。其後昭和三年七月二十五日再び同圃場で桑葉上に之を見た。従て本菌の發生時期は夏季より晩秋に亘るものと察せられる。併し其發生は他の菌類の如く普遍的では無く、極めて稀に認められるに過ぎない。其菌叢はレモン黄色を呈し、恰も花粉塊の如く頗る顯著であるが、單に葉面に附着せるのみで、何等寄主の組織に變色、破壊等の現象を起さざること煤病菌若くは *Epicoccum* 屬の菌類の如くである。菌叢の大きさは不定であるが大なるものは 3—4mm の直徑に達し、半球形をなしてゐる。一葉上に發生する菌叢の数は 1 個乃至 4—5 個位のもので、赤澁病菌の如く滿面に散發することは無い。

要するに本菌は生ける桑葉に限りて發生する Biophilous のものでは有るが、殆ど認め得べき被害を醸さないもので、實用上別に關係無きも一新種として學術上興味あるものと信ずる。

2. 菌 の 形 態

黄色の外觀を有する菌叢の大部分は孢子 (Conidia) の集塊であつて、擔子梗及び菌絲を鏡檢することは決して容易でない。

孢子は大體球形であるが、全面に刺狀の突起を帶び恰も金米糖の如く、且つ刺に大小の別ありて稍々多角形にも見える。之を壓迫すれば黄色球形の内容物が溢出する。孢子の直徑を測定したる値は次の如し。

40	37	38	40	40
35	28	35	26	36
36	35	35	37	34

41	33	38	40	45
39	38	40	31	35

即ち最大41 μ 、最小26 μ 、平均36.5 μ であり、菌類の分生子としては巨大なものである。

擔子梗は胞子の一端に着き圓筒形（挿圖の3）をなし、長さ30—35—45 μ 、太さ7—9—10 μ 、無色で膜厚く、密集して葉面上に直立して居る。擔子梗の基部は菌絲に連続せるもの（挿圖の5）の外、皮膜状をなして擴がり別に菌絲を認め得ないものがある。

菌絲は菌叢の成熟せるものでは僅かに周邊の部分にのみ存在するを見るから、恐らく一定の榮養期間を経たる後は壞類溶解して皮膜状に變じて了ふものであらう。菌絲は無色で其の太さは6—8—10 μ 、膜壁稍々厚く、節膜を有する。

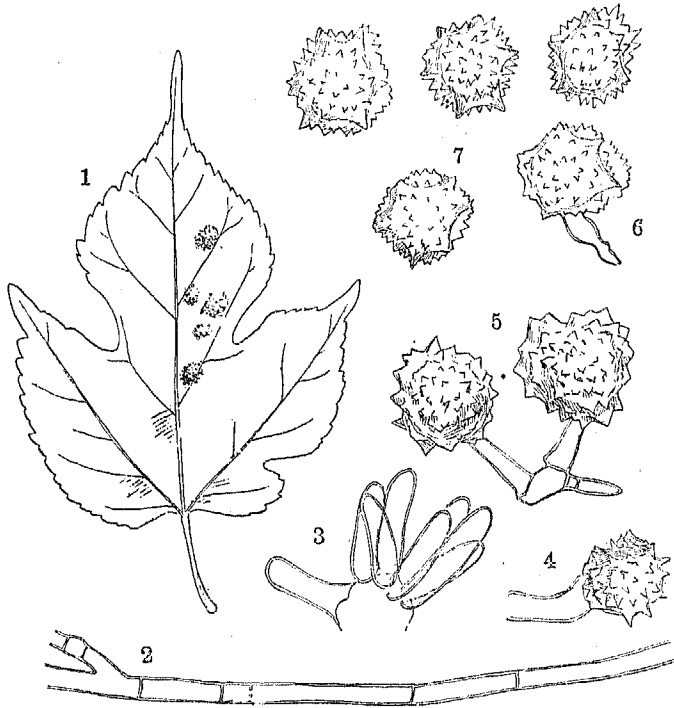


圖 解

1. 桑葉の上面に着生する黄色の菌叢
2. 菌 絲
3. 擔子梗群
4. 6. 分生子に擔子梗の着いて居るもの
5. 分生子に擔子梗及び菌絲の連続せるもの
7. 脱落せる分生子

3. 菌 の 所 屬

胞子として分生子のみを生じ、柄子殻を有せず、子坐を形成しない故、不完全菌綱 (Deuteromycetes) 中の念珠菌目 (Moniliales) に屬する。而して菌絲は無色、分生子は黄色、單胞、ほぼ球形であるから、念珠菌科 (Moniliaceae) の *Hyalosporae* に入るべく、更に菌絲の發達貧弱なる點で *Micronematae* に屬すること確實である。次に分生子が連鎖状を成さず全体として、頭状をなすこと、生葉に發生すること等の事實から *Glomerularia* 屬に當る。

Clemaents, Shear 兩氏の "The Genera of Fungi" には *Glomerularia corni* Pk. なるものが圖解 (53圖版3) してあり、ミツキ屬 (*Conus*) に寄生するもので分生子の直徑は大體10—12.5—15 μ で、本題の桑葉に發生するものとは分生子の大きさに於て格段の差がある。即ち1/3位の直徑である。

我邦に於て記載せられたものでは、台灣の澤田氏が樟の粉實病菌として *Glomerularia cinnamoni* Sawada を擧げて居るが、之は後に別屬の *Exobasidium* Sawadae Yamada と改名されて居る。

それで桑葉に發生するものを一新種とし、*Glomerularia Mori Yendō, sp. nov.* と名づけ「黄粉菌」の和名を與へたいと思ふ。

On *Glomerularia Mori*, sp. nov.

By Yasutarō YENDŌ and Yoshisato IMAMURA.

(Received Sep. 14, 1932.)

The present fungus was found several times on the mulberry leaves in our farm. It is merely an epiphyte, not causing any serious damage, but worthily to describe here as a new species.

Acervuli of this fungus are small, attaining 3-4mm in diameter, and scattering on the leaves very sparsely, sometimes only one, but conspicuous in its bright lemon yellow.

A little amount of sterile hyphae is observable, creeping on the epidermis of the host leaf, provided with many septa, 6-8-10 μ in width, colorless.

Conidiophores are short, cylindrical, 30-35-45 μ long and 7-9-10 μ wide, colorless, crowding vertically in the acervulus.

Conidia are not catenate, but capitate, bright yellow, almost spherical, 26-36.5-41 μ in diameter, with short spines on their whole surface.

This fungus, according to its characters above mentioned, may be an allied species to *Glomerularia corni* *Pk.* which has not yet been found in Japan, but it differs particularly in the size of conidia.